

令和2年度

布教
羅針盤

ふきょう
らしんばん

所求・所歸・去行

去行——ただ一向に
念仏すべし

令和二年度 布教羅針盤

所求・所帰・去行

去行——ただ一向に念仏すべし

はしがき

香薫る京都・知恩院、世界の名だたる観光地・京都を代表する大伽藍をひと目拝もうと、今日も世界各地から多くの人が足を運んでくださる。

桜舞う東京・増上寺、政治経済の中心地・東京の大都会にまるでオアシスを求めるかのように、それぞれの想いを抱き境内を人々が行き交う。

各大本山で、国内各教区・海外開教区各地にある地域に根付いた浄土宗寺院で、今日も法然上人の念仏のみ教えに触れていただく人がいる。

開宗八五〇年の節目を目前に控え、これからの浄土宗はグローバルな視点とローカルな視点を常に持ち続けなければならないと考える。グローバルな視点とは、相手の国籍や宗教宗派を問わず、縁があれば念仏を伝え浄土宗を広めていくという志である。そのためには例えばホームページやパンフレットなど観光ではなく布教のためのツールを充実し、かつ多言語対応やIT化を進める手法を挙げることができる。また、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）や動画サイトを利用すれば、今まで浄土宗に縁のなかった人に教えや救いを届けることができるかもしれない。志があれば、どんな

人に対しても時間と距離を問わずアプローチを試みることが出来る時代が現代である。そしてもう一方のローカルな視点とは、我々の本質である地域の歴史・伝統・信仰を伝え、先祖を祀る大切な心の拠り所としての寺院の姿であろう。

浄土宗における聖地はどこかと人に問われれば、私は法然上人の御廟ごびやうが思い浮かぶ。

法然上人は「念仏のするところ全て遺跡なり」と仰せになり、そのみ教えをありがたうにいただいている身であるが、一カ所挙げるとなると御廟と答えざるをえない。念仏の声と国際色豊かな参拝者の声が心地よく入り交じる知恩院大殿横から長い階段を上り、野鳥の声と木葉が風にざわめく音に支配されるあの空間。時間が止まっているかのような静謐せいひつの中で、僧侶としてというよりも、一人の弟子として師匠である法然上人と対面させていただいているようだ。法然上人の常念仏の息づかいが今も残っているかのように感じ、自然と南無阿弥陀仏が身体から声となって沸き上がってくる。

「凡ほんにゆうほうど入報土」私のような者でも救ってくださる方がいる。私のような者でも生まれさせていただける浄土がある。それを教えていただいたありがたさ。

浄土宗の根本は何か。「あなたの家は浄土宗なのだから」「先祖代々してきたのだから」この言葉に説得力があって、檀信徒を引き留めることができた、寺にとって幸せで怠惰な時代は終わった。「こういう仏壇でなければいけない。こういうお葬式でなければ

ばならない」これは浄土宗の布教ではない。本山布教師だけが布教をするのではない。浄土宗の看板を背負った僧侶一人ひとりが布教師であり、身命を賭して他人に対し、救われ難い我々が生まれ難い極楽浄土に往生できることを、念仏の衆生を決して漏らさないという阿弥陀仏の救いを伝えなければならない。いつまであるか分からない今生でどれだけの人に念仏を伝えることができるのか、阿弥陀仏の摂取の光に導くことができるのかを自身に問わなければならない。そのためには檀信徒はもちろんのこと、寺に縁がなかったような人とも出会い、コミュニケーションをとり、信用を得て信頼関係を築くことが現代では必要である。信用がなければ、真剣に話を聴いていただくことはできない。一般的な話と前置きするが、人々から我々僧侶はどのような目で見られているか、世間の評価はどうか。様々な統計がとられているがその結果に愕然とする。山門を閉ざしているときではない。門を開き積極的に外に出なければ、社会に出なければ、社会から必要とされる僧侶にならなければいけない。法然上人が比叡山を下りて浄土宗を開宗されたときのように。

「八五〇年前と今とを比較すること自体が馬鹿馬鹿しい」という人がいる。なんだつたら「現代人に苦しみなんてない」という人がいる。しかし果たしてそうであろうか。私は現代人の方がむしろさらに苦痛を受けているのではないかと思う。苦楽の楽が強調

されればされるほど苦は大きくなるのではないか。時代が変わっても人の根本の苦は変わらない。そして時代が変わっても、社会からの求めが多様化したとしても、我々が変わってはいけないものがある。それは信仰。浄土宗の僧侶であれば誰であつても同一でないといけないものが所求・所帰・去行である。

この『布教羅針盤』は平成二十九年より「凡入報土（救われていく道）」と題し、令和三年度まで都合五冊のシリーズとなっている。昨年まで所求二冊、所帰一冊発行し、本書は選択本願念仏を口称する「去行」をテーマとしている。ぜひこの『布教羅針盤』がその名の通り針がぶれることなきように、針の向きを個人の勝手な解釈で変えることなきように、浄土宗僧侶全員が未来へ指し示す一本の航路を共有し歩んでいけることを願ってやまない。

合 掌

令和二年四月

浄土宗宗務総長 川中光教

テーマ 「凡入報土（救われていく道）」

我、浄土宗を立つる心は、凡夫の報土に生まるることを、示さむためなり。

（『法然上人行状絵図』六）

私が浄土宗を立てた意趣は、凡夫が阿弥陀仏の報土に往生できることを示すためである。

（浄土宗総合研究所編『現代語訳 法然上人行状絵図』より）

法然上人のこのお言葉（心）が、我（法然上人）から我々（全浄土宗教師）に与えられたと認識したとき、全浄土宗教師の行動理念たるものになると考えます。すなわち、「示さむ」という意志に基づく自行化他の行動、教化活動こそが浄土宗教師のつとめでありましょう。

令和六年に浄土宗開宗八百五十年を迎えます。本宗の布教方針は、約八百五十年前に法然上人が専修念仏の法を確信し、やがて世に布教されたように、開宗の教えである「ただひたすらに称名念仏を修する専修念仏」を伝えることにあり、その行動指針は「凡夫の報土に生まるることを示す」ことに尽き、法然上人のご法語を通じ、救われていく道を布教することにあります。

この布教方針は、『二十一世紀劈頭宣言』（愚者の自覚を・家庭にみ仏の光を・社会に慈しみを・世界に共生を）ともいきに活かされているとおりです。

浄土宗の理想とする教師像は、寺院にて、社会にて、人々の集うところで、さまざまな所で、さまざまな機会に、「立教開宗のこころ」を伝える人であります。

◎目次◎

はしがき	浄土宗宗務総長 川中光教	2
------	--------------	---

布教方針		6
------	--	---

教諭	浄土門主 伊藤唯眞猊下	11
----	-------------	----

第1章 去行——ただ一向に念仏すべし

往生のためには念仏第一なり	佛教大学教授 伊藤真宏	16
---------------	-------------	----

第2章 宗祖のご法語をいただいて

一、泥中の蓮

.....北海道第一教区 浄土寺 長尾晃行 42

二、ご本願の行なれ

.....千葉教区 医王寺 八木英哉 55

三、お念仏の道

.....大阪教区 来迎寺 白川雅宏 71

四、お念佛からはじまる幸せ

.....大分教区 蓮華寺 鶴山恒教 82

あとがき..... 浄土宗教学部 93

凡 例

典拠を示すにあたっては次の略号を用いた。書名のあとの数字は、巻数および頁数を示す。

○聖典……浄土宗聖典（浄土宗）

○昭法全……昭和新修法然上人全集（平楽寺書店）

○浄全……浄土宗全書（山喜房仏書林）

○御法語……『平成新版元祖大師御法語 前篇・後篇』（知恩院）

なお引用文は、漢文は書き下し文に、旧字・旧仮名づかいは、新字・現代仮名づかにあらためたほか、適宜ルビを付した。

教 諭

日本は新しい令和の時代を迎え、本宗においても四年後には宗祖法然上人開宗八百五十年の記念すべき佳辰を迎えます。

この開宗八百五十年に向け、布教方針に「凡入報土（救われていく道）」をテーマとして掲げ、所求・所帰・去行の浄土宗の信仰や教行の三要素をとりあげております。

法然上人は「一紙小消息」に

十方に浄土多けれど、西方を願うは、十悪五逆の衆生の生まるる故なり。諸佛の中に弥陀に帰したてまつるは、三念五念に至るまで、みずから来迎し給う故なり。

とお説きになっておられます。

十方の浄土の中で、凡夫の私たちが求める所は西方極楽浄土であります。多くのみ佛の中で、帰依する佛さまは衆生を自ら極楽へお迎え下さる阿弥陀佛であります。

「一紙小消息」では続けて

諸行の中に念佛を用うるは、彼の佛の本願なる故なり。

とお説きになっておられます。

様々な行の中で念佛を用いるのは、阿弥陀佛の本願であるからであります。

阿弥陀佛は四十八の誓願を起こされ、その中の万人救済の往生の願を念佛往生の本願とさ

れるのであります。

宗祖法然上人ご往生の後、八百余年の歳月を経て、いかに文明科学の進歩によつて社会環境が変遷しても、私たち愚者が生死の迷いの道を離れ救われる道は、阿弥陀佛のみ名をお称えし、極楽浄土へ往生する外にはありません。

来たるべき開宗八百五十年を迎えるにあたり僧俗共に極楽浄土を求め、阿弥陀佛に帰依し、称名念佛行を實踐するとともに、広く社会に念佛信仰を弘通してまいりましょう。

合 掌

令和二年一月一日

浄土門主 願譽唯眞

◎第1章◎

去行

——

ただ一向に念仏すべし

往生のためには念仏第一なり

佛教大学教授 伊藤 真宏

1 はじめに

すでに、所求^{しよぐ}については平成二十九年と三十年、所帰^{しよき}については三十一年（令和元年）、都合三年にわたって大正大学の曾根宣雄先生が詳細に述べてくださり、私も少々解説いたしました。本稿では残る、去行^{こぎよう}について述べてまいります。去行とは、信仰の三要素、目的・対象・実践に当たり、浄土宗では念仏のことを言います。周知のことですが、所求^{しよぐ}＝目的、所帰^{しよき}＝対象、去行^{こぎよう}＝実践であり、この三要素を当てはめると、浄土宗の信仰とは、極楽往生を目的に、阿弥陀仏を対象とし、念仏を実践することになります。よって本稿では念仏の実践行について学んでみましょう。

2 念仏為先

法然上人は、『せんぢやく選 択 本 願 念 仏 集』(以下『選 択 集』と略す)の開卷劈頭に、「選 択 本 願 念 仏 集 南 無 阿 弥 陀 仏 往 生 之 業 念 仏 為 先」の二十一文字を直筆で認められました。

『選 択 集』は口述筆記とされ、安樂房 遵 西、真觀房 感 西が筆記し、勘文役の善慧房 証 空が携わって成立しました。勘文役とは、由来や先例など、必要な情報を調査する役割で、『選 択 集』執筆場面で証空は、法然上人の口述について、引用文献を実際に確認し、文章を整える作業を担いました。

廬 山 寺に所蔵される『選 択 集』古抄本は、草稿と言われ、文字の削除や挿入の痕跡がそのまま残っています。最後まで述べ終えられ、一通り完成された後、冒頭に題号「選 択 本 願 念 仏 集」と名号「南無阿弥陀仏」、そして「往生之業念仏為先」の二十一文字を、法然上人自らが直接書き込まれたと考えられています。⁽¹⁾

筆記が安樂と感西であり、安樂は、役が与えられたことに慢心を起こしたため、途中で感西に交代させられたことが『法然上人行状絵図』等に出ています。⁽²⁾

さて、廬山寺藏『選択集』の冒頭に、『選択集』の一応の完成時点で、法然上人ご自身が、題と名号と、そして次に「往生之業念仏為先」と認められた、このことは、重要なことを意味します。

「往生之業念仏為先」について、二祖聖光上人は「往生には、念仏を第一とする」と解釈し、三祖良忠上人は前後の意味でなく「最要」と解釈していますが、何よりも、法然上人は、まず念仏という実践がなされることを指し示されているのであり、まさしく浄土宗の去行としてのあり方を、『選択集』完成の証に表明されているといえましょう。

法然上人は、『和語灯録』四「諸人伝説の詞」で沙彌道遍に次のように語りました。

往生のためには念仏第一なり。学問すべからず。ただし念仏往生を信ぜん程はこれを学すべし。⁽³⁾

これは重く受け留めるべき言葉です。極楽に往生するという点について、念仏をとなえることこそ第一、というのであり、信心が起こる程度には学べとはいうものの、学問は不必要というのですから、何よりも念仏を実践することが求められているといえます。「念仏為

先」の意味がここにあります。ではその念仏とはいかなるものでしょう。

3 南無阿弥陀仏

去行としての実践は、念仏をおとなえすることです。南無阿弥陀仏とはどういうことか、周知のことと思われませんが、改めて確認しておきましょう。

「南無阿弥陀仏」は、善導大師が『観經疏』玄義分で、

南無阿弥陀仏と言うは、又、是れ西国の正音なり。又、南は是れ帰、無は是れ命、阿は是れ無、弥は是れ量、陀は是れ寿、仏は是れ覺なり。故に、歸命無量寿覺と言う。此れ乃ち、梵漢ほんかん相對するに、其の義此の如し。今、無量寿と言うは、是れ法、覺とは是れ人、人法並べ彰す故に、阿弥陀仏と名く⁽⁴⁾

といい、また、

南無と言は、即ち是れ帰命、亦是れ發願ほつがんえんこう回向の義、阿弥陀仏と言は、即ち是れ其の行なり。斯の義を以ての故に、必ず往生を得。⁽⁵⁾

と述べられています。南無は帰命を意味し、仏や三宝さんぼうに帰依することです。發願回向とは、願いを發し、功德くどくを振り向けることです。つまり「南無阿弥陀仏」とは、阿弥陀仏への帰依と、阿弥陀仏の極樂淨土へ往生したいと願って一切の善根功德ぜんこんを往生へ振り向けること、と善導大師は説明しているのです。南無阿弥陀仏となえることは、すべてを阿弥陀仏に任せ切る表白ひょうびやくであり、極樂淨土に往生したいと願う決意の表象であり、自他の善根功德をすべて自己の往生に回し向け歸結させることとなります。

その「南無阿弥陀仏」——念仏には、主に二つの意味があります。念仏とは文字通り「仏を念ずる」ことですが、その「仏を念ずる」について觀想念仏と称名念仏があります。觀想念仏は仏の姿や功德などを心に想い念じること、詳細に言えば、仏の相好や姿形を心に想い浮かべたり、その仏の仏国土の様子を想い念じたり、仏の法身を觀じること。これは仏教全般でなされる修行です。称名念仏は、南無阿弥陀仏と声に出してとなえることです。

『無量寿経』第十八願で「設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆 誹謗正法」と示されている「十念」は、『観無量寿経』下品下生で「令声不絶 具足十念 称南無阿弥陀仏」の「十念」と一致し、十遍の念仏は十回、南無阿弥陀仏となえることと理解します。これを「念称是^{ぜい}一^{いつ}」といいます。

つまり、浄土宗において念仏は、口で南無阿弥陀仏となえること、に尽きるといえましょう。ではその念仏のとなえ方とは、どのようなものでしょう。念仏の実践というについて見ていきましょう。

4 去行としての念仏行

法然上人は『御消息^{ごしやうそく}』の中で、「浄土に往生せんとおもわん人は、安心起行^{あんじんきぎやう}と申して、心と行と相応すべきなり」と述べ、安心、起行という用語を使用して、往生したい人は、「信心」と「行」が一致すべきである、と説かれています。

およそ浄土往生を求めるものの心得や実践方法を安心、起行、作業という三つの言葉で表

します。これは、善導大師が『往生礼讃』^{らいさん}の序に「今、人を勧めて往生せしめんと欲するは、未だ知らず。いかんが安心し起行し作業して、定んで彼の国に往生することを得んや」⁽⁶⁾と述べられ、続いて、三心と五念門と四修を説明しています。

したがって、安心、起行、作業が順番に、三心、五念門、四修と説明されていることから、起行は五念門を行ずることと位置付けられています。

五念門とは、世親が『無量寿経優婆提舍願生偈』⁽⁷⁾（『往生論』）で説き明かした「安楽国土に生まれ、阿弥陀仏を見たとまつる」行です。それを受けて善導大師は『往生礼讃』で次のように説明しています。

一には身業礼拝門。^{しんごうらいはいもん} いわゆる一心に専ら至して恭敬合掌し、^{くぎよう}香華供養して、彼の阿弥陀仏を礼拝す。礼するには即ち専ら彼の仏を礼して、畢命を期として余礼を雑えず。故に礼拝門と名づく。

二には口業讃歎門。^{くごうさんだん} いわゆる意を専らにして、彼の仏の身相光明、一切の聖衆の身相光明、及び彼の国中の一切の宝莊嚴の光明等を讃歎す。故に讃歎門と名づく。

三には意業憶念觀察門。^{いごうおくねんかんさつ} いわゆる意を専らにして、彼の仏及び一切の聖衆の身相光明、

国土莊嚴等を念観す。観經に説くが如く、ただ睡時を除きて、この事等を、恒に憶し恒に念じ恒に想し恒に観ず。故に観察門と名づく。

四には作願門。いわゆる心を専らにして、若しは昼、若しは夜、一切時、一切の処に、三業さんごう四威儀しゐぎの所作の功德、初中後を問はず、皆すべからく眞実心の中に発願して、彼の国に生ぜんと願ずべし。故に作願門と名づく。

五には回向門。いわゆる心を専らにして、若しは自作の善根、及び一切の三乗五道、一々の聖凡等の所作の善根に深く随喜を生ず。諸仏菩薩の所作の随喜の如く、我もまた是の如く随喜して、この随喜の善根及びおのれが所作の善根を以って、皆ことごとく衆生とこれを共にして彼の国に回向す。故に回向門と名づく。

また彼の国に到りおわつて六神通ろくじんずうを得て生死に回入して、衆生を教化すること後際を徹窮して、心に厭足なく、すなわち成仏に至るをまた回向門と名づく。

五門すでに具すれば、定めて往生することを得。一々の門、上の三心と合す。随ひて業行を起せば、多少を問わず、皆、眞実の業と名づくなり。まさに知るべし。

これによれば、礼拝門は、身業、つまり身体の行為と位置づけ、心から恭しく敬いつつ合

掌し、お香やお花を供養して、一生涯、他を礼拝しないで、阿弥陀仏を礼拝することです。

次に、讃歎門は、口業、つまり口での行為と位置づけ、専心に、阿弥陀仏のお姿や光明や極楽浄土のすべての菩薩のお姿や光明、極楽浄土のすべての情景を、讃歎することです。なお、曇鸞^{とんらん}の『往生論註』における讃歎門の説明では、「いかに讃歎する。口業をもって讃歎したてまつる。(中略)彼の如来の名を稱するに、彼の如来の光明智相のごとく、彼の名義のごとく、如実に修行して相應せんと欲するがゆえに⁽⁸⁾」とあり、称名念仏は讃歎門に該当します。

観察門は、意業、つまり心での行為と位置づけ、専心に、阿弥陀仏とすべての菩薩のお姿や光明、極楽浄土世界の情景などを心に思い浮かべ間違いないようによく見ること、『無量寿経』に説いてあるように、ただひたすら、睡眠時を除いては、常に憶え、常に心に留め思い、常に心に思い浮かべ、常に間違いないようによく見ることです。

作願門は、専心に、昼も夜もいついかなる時や所でも、身と口と心の三業や、行(動いている時)住(止まっている時)坐(座っている時)臥(横になっている時)の四威儀で行なう善根功德、またその修し始め、修している最中、修し終えた後をも問わず、すべて真実心でもって極楽浄土に往生したいと願うことです。

そして、回向門は、専心に、自分の作った善根と、そしてしょうもん声聞乘、えんがく縁覺乘、菩薩乘の三乗と地獄、餓鬼、畜生、人、天の五道に居る優れた人から愚かな人々、そのひとりひとりが行なった善根功德に、喜びの心を起こすことです。諸仏や菩薩が喜びの心を起こされるように、自分も喜びの心を起こし、この「喜びの心を起こす」功德と自分の善根功德を、全て、一切衆生と共に極樂浄土へ往生できる功德として廻し向けます。また往生した後、不退転の菩薩となつて、六神通という特殊な力を獲得し、あえて輪廻りんねの世界に歸つてきて、未來永劫に人々を教化し、その教化に飽きることなく、その功德によつて最終的に成仏に至ることです。善導大師はこのように、念仏の実践方法としては五念門を行じること、と定義付けられました。⁽⁹⁾

また『觀經疏』定善義には、

衆生、行を起こして、口、常に仏を称すれば、仏すなわち、これを聞きたまう。身、常に仏を礼敬すれば、仏すなわち、これを見たまう。心、常に仏を念ずれば、仏すなわち、これを知りたまう。衆生、仏を憶念すれば、仏また、衆生を憶念したまう。彼此の三業(10)相い捨離せず。故に親縁と名づく

とあって、『往生礼讃』で提示した念仏実践の起行としての五念門の内容が、より具体的に、より分かりやすく述べられています。口では常に仏をとなえ、身では常に仏を礼敬し、心では常に念じ、また仏を憶念する、と言うことは、『往生礼讃』で説き明かされた五念門と共通するところであり、善導大師が「行」として示すのは、「常」に「阿弥陀仏」と身と口と意で離れない在り方、ということができます。

さて善導大師の「行」は確認できましたが、法然上人はいかがでしょう。「偏依善導一師」を標榜された法然上人は、当然、善導大師を踏襲されているのでしようが、五念門について、あまり言及されません。法然上人の文献に数例あるぐらいで、むしろ、五種正行しやうぎやうが注目されます。

法然上人は、『選択集』第二章において、まず『観経疏』散善義の就行立信釈を引用されます。

観経疏の第四に云く、行に就いて信を立つとは、然るに行に二種有り。一には正行、二には雑行なり。正行と言うは、専ら往生経に依つて行を行ずる者、これを正行と名づく。

何の者かとなる。一心に専らこの觀經・弥陀經・無量壽經等を誦誦^{とくじゆ}し、一心に專注して彼の国の二報莊嚴を思想し觀察し憶念し、若し礼するには即ち一心に専ら彼の仏を礼し、若し口称するには即ち一心に専ら彼の仏を称し、若し讚歎供養するには即ち一心に専ら讚歎供養す。是を名づけて正とす。又此の正の中に就いて、また二種有り。一には一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥^{ぎようじゆうざが}に時節の久近を問はず念念に捨てざる者、是を正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に。若し礼誦等に依るをば即ち名づけて助業とす。此の正助二行を除いて已外の、自余の諸善をば悉く雜行と名づく。若し前の正助二行を修すれば、心常に親近し憶念して断えざるを、名づけて無間とす。若し後の雜行を行ずれば、即ち心常に間斷す。回向して生ずることを得べしと雖も、疎雜の行と名づく。⁽¹¹⁾

この部分をよく讀むと、善導大師は行に就いて信を立てることに、正行と雜行の二種を分別されますが、正行の説明では、「一心に専ら」讀誦し、一心に専ら「觀察憶念し、若し礼せば一心に専ら」礼し、若し口称せば一心に専ら「称し、若し讚歎供養せば一心に専ら讚歎供養」と示されていて、特に分別することなく、また五念門の順序も特に意識されること

なく、いわばアトランダムに叙述されているように感じます。また、この正行を、正定業と助業に分別され、正助二行という用語も使用されていますが、それ以外に分別はなく、口称を正定業とした行によって信を立てることを述べられます。

こここのところを法然上人は、以下のように私釈されます。

私に云く、この文に就いて二の意有り。一には往生の行相を明し、二には二行の得失を判す。

初めに往生の行相を明すとは、善導和尚の意に依るに往生の行多しといえども、大に分ちて二と為す。一には正行、二には雑行なり。初めに正行とは、これに付いて開合の二義有り。初めには開して五種とし、後には合して二種とす。初めの開して五種とすとは、一には読誦正行、二には觀察正行、三には礼拝正行、四には称名正行、五には讃歎供養正行なり。

第一に読誦正行とは専ら『觀經』等を讀誦する。すなわち文に、「一心に専らこの『觀經』・『弥陀經』・『無量壽經』等を讀誦す」と云えるこれなり。

第二に觀察正行とは専ら彼の国の依正二報えしょうにほうを觀察する。すなわち文に、「一心に專注し

て彼の国の二報莊嚴を思想し觀察し憶念す」と言えるこれなり。

第三に礼拝正行とは、専ら弥陀を礼する。すなわち文に、「もし礼するには、すなわち一心に専ら彼の仏を礼す」と言えるこれなり。

第四に称名正行とは、専ら弥陀の名号を称する。すなわち文に、「もし口に称するには、すなわち一心に専ら彼の仏を称す」と云えるこれなり。

第五に讚歎供養正行とは、専ら弥陀を讚歎供養する。すなわち文に、「もし讚歎供養するには、すなわち一心に専ら讚歎供養す。これを名づけて正と為す」と云えるこれなり。もし讚歎と供養とを開して二と為せば、六種正行と名づくべし。今合の義に依るが故に五種と言う。

次に合して二種とすとは、一には正業、二には助業なり。初めに正業とは、上の五種の中の第四の称名を以て正定の業とす。すなわち文に、「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住坐臥に時節の久近を問わず。念念に捨てざる者、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」と云えるこれなり。次に助業とは、第四の口称を除いて外、読誦等の四種を以て助業とす。すなわち文に、「もし礼誦等に依らば、すなわち名づけて助業とす」と云えるこれなり。⁽¹²⁾

善導大師の就行立信釈の文章について、まず法然上人は、善導大師が、①「往生の行相」について、②「二行の得失」について説明している、と言い、①「往生の行相」については、善導大師と同様に、往生のためのすべての行を、正行と雑行の二つに分類されます。この正行について法然上人は「開く」義に五種、「合する」義に二種があるとし、「開く」義の方で、善導大師が一見アトランダムに並べ立てた正行に「五種正行」という枠組みを与えられました。また「讃歎供養」を「讃歎」と「供養」に分割した場合は「六種正行」とまで述べておられるので、善導大師の叙述にしっかりと枠組みを与え、より体系的に行の姿を明示されたということができます。「合する」義は、その枠組みを前提にして、「第四の称名」を正定業、「第四の口称」を除いてその他「四種」を助業、と規定されていますから、善導大師の正行の叙述は、法然上人によって、「五種（六種）正行」と分別、規定され、より一層、「正行」としてのありかたが明確になり、よって、「口称」すなわち「称名正行」を中心とする行体系が示されることになりました。

法然上人は、本来、善導大師が「安心」としての三心の中の深心の解釈で、深く信じる方法としての二つ、「人」と「行」で信心を得ていく説明の「行」に注目され、そこに「五種

（六種）「正行」という、型に嵌める枠組みを与えて、善導大師より明確な「行」としての意義を強調されることに成功した、ということができましよう。

『選択集』第二章における、法然上人が根拠として引用された、この善導大師のお示しは、本来、行によって信を立つ「就行立信^{じゆぎょうりつしん}」という部分で、三心の深心を解釈したところです。深心は深信といい、深く信じることにについて懇切丁寧に説明されます。三心は、再三申し上げていますように安心―念仏する心持ちを具体的に説くもので、善導大師は念仏を行ずる中に信の確立を示されたわけです。善導大師にとって「行」といえば、五念門。世親以来、五念門で称名念仏は口業讃歎門に位置づけられるとはいえず、『往生礼讃』の説明だけでは、称名念仏という用語もなく、往生のための行としては明確でないように感じます。それに対し法然上人は、善導大師の就行立信に述べられた部分に、「五種正行」という枠組みを与えられ、その上で称名念仏が正定業とされたことで、専修念仏一行が、より明確になりました。称名中心の念仏実践行がより明確になったといえましよう。

5 ただ往生極楽のために

周知のように法然上人は、『一枚起請文』に、「ただ往生極楽の為には南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思いとりて申す他には別の仔細候わず」と述べられました。ここにも「念仏為先」の心が顕現けんげんしています。

観念の念仏でなく、念仏が何かを理解して申すのでもない。ただ、往生のためには南無阿弥陀仏と申し、疑いなく往生すると思いきくして申す以外にない、という『一枚起請文』の説相は、まさしく「往生のため―念仏申す」のであり、それ以外にない、という実践最優先ということが出来ます。

『一枚起請文』は、法然上人が往生なさる二日前に、常在給仕の弟子、源智上人の要請に応じて、それまで伏せておられたところ、やおら起き上がって一枚の紙に認められたところの「遺訓」といわれ、その時初めて成立したようにも受け取られています。実は『一枚起請文』はこの源智伝承本以外に、二祖聖光上人に送られた弁阿伝承本があり、「善導寺御消息」と言われる文献が現存しています。それがいつ法然上人から聖光上人に授けられたの

かは不明ですが、少なくとも源智上人に授ける以前から『一枚起請文』の内容は成立していたのであり、源智上人と聖光上人以外の弟子に授けられた可能性もあります。「諸人伝説の詞」⁽¹³⁾には法然上人の弟子が伝承した法然上人のお言葉が紹介されますが、聖光上人の伝承のところに所収されていますので以下に引用してみしましょう。

又上人の給わく。念仏往生と申す事は。もろこしわが朝の。もろもろの智者たちの沙汰し申さるる觀念の念仏にもあらず。又學問をして念仏の心をさとりとおして申す念仏にもあらず。ただ極樂に往生せんがために南無阿弥陀仏と申してうたがいなく往生するぞとおもいとりて申すほかに。別の事なし。ただし三心ぞ四修ぞなど申す事の候は。みな南無阿弥陀仏にて決定して往生するぞとおもううちにおさまれり。ただ南無阿弥陀仏と申せば。決定して往生する事なりと信じとるべき也。念仏を信ぜん人は。たとい一代の御法をよくよく学しきはめたる人なりとも。文字一つもしらぬ愚癡鈍根の不覺の身になして。尼入道の無智のともがらにわが身をおなじく^{ぐちどんこん}なして。智者のふるまいせずして。ただ一向に南無阿弥陀仏と申してぞ叶わんずる。と。⁽¹⁴⁾

これを見ると、多少言葉遣いが違うものの、源智伝承の『一枚起請文』と大筋では同内容です。「ただ極楽に往生するために南無阿弥陀仏と申す」という念仏実践が最優先に述べられています。ここで注目すべきは、冒頭に「念仏往生と申す事は」とおっしゃっていることです。念仏往生とは南無阿弥陀仏と申すことであると、より明確に示しているといえます。

6 むすび

去行について、本願念仏の実践行ということを善導大師と法然上人についてひもときました。法然上人は、「念仏為先」―「ただ往生極楽のためには南無阿弥陀仏と申す」ということを明確に述べられました。そして、五種正行という枠組みから「称名正行」Ⅱ「正定業」という念仏中心の行体系を明確にされました。そして「念仏をとなえる」という行為が第一であることを法然上人は示しているのです。

釈尊は、一刻も早く修行しさとりに導かれる必要があることを、刺さった毒矢にたとえて

います。⁽¹⁵⁾

ある人が毒矢に射られたとして、その家族や友人は医者に見せて早く矢を抜こうとします。しかし本人が「矢を射た人の身分は、名前は、背の高低は、肌色は何、どこに住んでいるのか、それが分からないなら矢を抜くな」と言えばどうなるかと問われ、その人はそれを知るまでに死ぬだろう、と諭されます。

「念仏為先」とは、この毒矢のたとえのとおり、とにかく念仏申せということを表出した法然渾身の一言であるといえるでしょう。法然浄土教思想における去行としての実践は、何を置いてもまず第一に念仏をとなえる「念仏為先」である、と確認できるかと思っています。

さて、四回にわたって、所求・所帰・去行について曾根先生と確認してまいりました。最後に『一紙小消息』で所求・所帰・去行に相当する説明がありますのでご紹介します。

十方に浄土多けれど西方を願うは、十悪五逆の衆生の、生るる故也。——所求

諸仏の中に弥陀に帰し奉るは、三念五念に至るまで、自ら来迎し賜う故也。——所帰

諸行の中に念仏を用うるは、彼の仏の本願なる故也。——去行

また『和語灯録』の注釈である『和語灯録日講私記』一に、安心と起行について、

喩えば清水へ参らんとするは安心なり。一足一足行きて足を運ぶは起行なり。⁽¹⁶⁾

と言ひ、それに続いて、

其の所求とは西方なり。(中略)次に所歸の心の置き様はただ阿弥陀如来に歸依するなり。(中略)次に去行の心の置き様は(中略)ただこの念仏の一行を願じたまうなり」⁽¹⁷⁾

と説明しています。

私たちは、ただ極楽に往生することを願ひ、阿弥陀仏に歸依し、念仏をとる、そのことだけに心を寄せ、自らは念仏し他者には念仏を勧める日々を過ごさなければなりません。「ただ一向に念仏すべし」とは、そういうことなのです。

【註】

(1) 証空の『選^{せん}択^{ちやく}密^{みつ}要^{よう}決^{けつ}』に、感西・証空・安樂にそれぞれ法談・勘文・執筆の役を

受け持たせる記述があり（『浄全』八・二四七頁・上）、執筆について、聖罔は『決疑鈔直牒』七に「相伝に云く、この選^{せん}択^{ちやく}集には多く執筆有。謂く選^{せん}択^{ちやく}本願より念仏為先の註に至るまで上人の御自筆なり。第一篇より第三本願章能令瓦礫變成金の文に至るまで安樂房の執筆なり。問曰一切菩薩雖立其願より十二付属章至るまで真觀房の執筆なり。第十三章より第十六章の私に云わくより一如經法応知までは他筆なり。名字を失す。静以善導以下は又真觀房の執筆なり」（『浄全』七・五四七頁・上）と述べ、開卷劈頭の「選^{せん}択^{ちやく}本願念仏集 南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先」の二十一文字を法然真筆、本文を、遵西↓感西↓不明↓感西と執筆者が交代したこと、それらが相伝であったことを記しているが、これが廬山寺藏『選^{せん}択^{ちやく}集』の筆跡と一致している。

(2) 『法然上人行狀繪図』十一、『法然上人伝記（九卷伝）』三・上、『法然上人伝（十卷伝）』五（井川定慶『法然上人伝全集』四九〜五〇頁、三六三〜三六四頁、六八四頁）など。

(3) 『淨全』 九・六〇九頁

(4) 『淨全』 二・二頁

(5) 『淨全』 二・一〇頁

(6) 『淨全』 四・三五四頁・下

(7) 『淨全』 一・一九三頁

(8) 『淨全』 一・二三八頁・上

(9) 世親の『往生論』では「若し善男子善女人、五念門を修して行成就しぬれば、畢竟きやうじやうして安樂国土あんらくこくどに生じて、彼の阿弥陀佛あみだぶつを見たてまつることを得。何等か五念門。一には禮拜門、二には讚歎門、三には作願門、四には觀察門、五には回向門なり。云何が禮拜する。身業をもて阿弥陀如来・応・正遍知を禮拜したてまつる。彼の国に生ずる意を為すが故なり。云何が讚歎する。口業をもて讚歎したてまつる。彼の如来の名を称するに、彼の如来の光明智相くわうみやうちそうのごとく、彼の名義のごとく、如実に修行して相応せむと欲するが故なり。云何が作願いかんする。心に常に願を作し、一心に専ら畢竟して安樂国土に往生せむと念ず。如実に奢摩他しゃまたを修行せむと欲するが故なり。云何が觀察する。智慧をもて觀察し、正念に彼を觀みず。如実に毘婆びば

舍那^{しゃな}を修行せむと欲するが故なり。彼の觀察に三種有り。何等か三種。一には彼の佛国土の莊嚴功德を觀察す。二には阿弥陀佛の莊嚴功德を觀察す。三には彼の諸菩薩の功德莊嚴を觀察す。云何が回向する。一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に願を作し、回向を首と爲す。大悲心を成就することを得むとするが故なり。」「〔浄全〕一・一九三頁〕とあつて、善導大師は作願と觀察の順序を入れ替えている。また個々の説明も、『往生礼讃』のそれは善導流の説明と言えるが、その意義については、他稿に譲る。

(10) 『浄全』二・四九頁

(11) 『聖典』三・一一〇―一二頁

(12) 『聖典』三・一二〇―一四頁

(13) 『和語灯録』五

(14) 『浄全』九・六〇五頁

(15) 『中阿含經』六〇「箭喻經」〔『大正藏』一・八〇四・上〇五頁・下、国訳一切經六、三八四―三八九頁〕。『中阿含經』「箭喻經」は北伝の漢訳仏典。南伝のパリ仏典は、中部六三『小マールンクヤ經』（南伝大藏經十）に記されている。

- (16) 『浄全』 九・六八七頁
- (17) 『浄全』 九・六八七頁・下↳六八八頁・下

◎第2章◎

宗祖のご法語をいただいて

一、泥中の蓮

北海道第一教区 浄土寺
長尾 晃行

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く^{のたまわ}

「ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思ひ取りて申す外には別の仔細候わず」と。(十念)

(「一枚起請文」 Ⅱ 『浄土宗信徒日常勤行式』より)

皆さまこんにちは。本日はようこそお参りくださいました。どうぞ、お楽になさっていただけだと思います。

北海道の小樽市から参りました浄土寺の長尾と申します。私の住んでいる北海道で、先日こんなニュースがありました。北海道の東側、オホーツク海に面したところに「オホーツク紋別空港」という空港があります。自坊がある小樽は、北海道の西、日本海の石狩湾に面したところにありますので、同じ北海道といっても約三百キロも離れています。その空港に着陸した飛行機が滑走路で立往生し、乗客ら一六四人が一時間ほど機内に閉じ込められました。十一月の中旬というと北海道の中でも、雪が積もっている地域は稀ですが、たまに爆弾低気圧という急速に発達した低気圧の影響で吹雪になることがあります。まさにこの爆弾低気圧の影響により、滑走路の端に凍結や吹きだまりができ、スリップして立往生したのです。幸いにもけが人は出なかったということで、深刻な状況にならずよかったです。このニュースの中でアナウンサーが「立往生」という言葉を用いて、飛行機が雪の影響で、身動きが取れなくなったということを説明していました。確かに一般的には、このように「往生」という言葉は、どちらかというとあまり良い意味では用いませぬね。

漫才コンビの「大木こだま・ひびき」のこだまさんが、「往生しまっせ〜」というセリフ

を漫才でよく使っておられますが、これは「死ぬほど大変な目に合います」「行き詰まってどうにもならない」というような場面で用います。

また、「往生」は単に「死」という意味で使われたりします。文治五年（一一八九）の衣川^{がわ}の戦いで、多数の敵を相手にした武蔵坊弁慶は、主君であった源義経を守ろうと、薙刀を振るって奮闘するも、敵の矢を無数に受け、立ったまま絶命しました。いわゆる「弁慶の立往生」ですね。このように、一般的には「往生」イコール「死」である、または、あまり良い意味で用いられない言葉ではありますが、しかし、仏教で言う「往生」はそうではありません。書いて字のごとく、「往^ゆき生まれる」ということであります。では、どこに往き生まれるのでしょうか。

それは皆さまの正面にある輝かしい御内陣、つまり阿弥陀如来さまが居られる西方極楽浄土です。皆さまのご先祖さまもいらっしゃる極楽浄土に往き生まれさせていただくことを「往生」と申します。そのお浄土へどうすれば、往き生まれさせていただけるのか、ということをお示しであるのが、冒頭で拝読させていただきました、法然上人のご遺訓「一枚起請文」の中の御一文です。

もう一度となえてみますと、

ただ往生極樂のためには、南無阿弥陀仏と申して、うたがいなく往生するぞと思い取りて申す外には別の仔細候わず

その内容の意味は、極樂浄土に往生するためには、疑うことなく「南無阿弥陀仏とお念仏を申して、間違いなく往生できるのだ」と思い定めてお念仏を申す。それ以外に何も特別なことはないですよ、ということです。

先のお話に戻りますが、「往生する」というのは、一般的には「往生」イコール「死」であるというような意味で使われています。「死んだらおしまい」「終わりだ」と一般的に受け止められていますから、先ほどのような「立往生」や「往生しまっせ」というような使われ方をしているのです。

しかしながら、先ほども申しましたように、本当のところは、真に幸せな世界、良き世界であるお浄土に往生生まれさせていただけ、ということ。もう少し詳しく申しますと、法然上人は「往生」とは「捨此しや往彼おうひ蓮華れんげ化生けしやう」であると仰っています。「捨此」は「ここをすて」、「この娑婆世界しやばを捨てて」、「往彼」ですから「彼」の土へ「往く」のです。「彼」の土

というのは、「お浄土」のことです。実はお浄土はたくさんあるのですが、ここではもちろん阿弥陀さまのお浄土である極楽浄土を指します。そして、「蓮華化生」とは、お浄土に咲く蓮の花の台、つまり蓮の花の上に、生まれさせていただくことを申します。「化生」とは卵やお母さんのおなかから生まれるのではなく、ある空間に忽然として生まれることを言います。ですから、極楽の蓮の上に急にポコンと生まれるわけですね。

私のお寺ではもう十五年ほど前から蓮の花を育てております。北海道の冬は寒く厳しいため、冬の間は蓮の鉢を堂内に入れて越冬させるという手間が掛かりますが、何とか毎年花を咲かすことが出来ております。蓮の植え替えは、全国的に毎年桜の咲く時期に行っており、当地はちょうどゴールデンウィークに桜が咲いていますので、その期間中に植え替えをしています。土の入れ替えもしますから、体力勝負という感じです。そしてその土とか泥の中に根があつて、その汚い泥からあの美しい蓮の花が咲くのです。

仏教の言葉として有名な「泥^{でいぢゅうのはす}中之蓮」は、蓮が泥の中にありながら、泥に染まることなく、美しい清らかな花を咲かせることを述べる言葉です。私たちの生きている世界は娑婆世界と申して、苦しみ悩みの多い汚れた世界、つまり泥の中にいるようなものなのですが、そんな環境の中からでも、「蓮華化生」することによって清らかで綺麗な花のような身となら

せていただけるのです。ちょうど泥の中から咲く美しい蓮のように。

ではどうすれば「蓮華化生」できるか、すなわち往生できるかといえ、それがお念仏です。でもなぜお念仏なのでしょう。その理由について次にお話しさせていただきます。

そもそも仏教はその目標である悟りの境地に到るために、厳しい修行や難しい教えの理解が必要とされます。ところが私たちには、その実践は相当に困難なことといえます。そのような中であって、私たちでも誰もが等しく、たやすく実践出来るのがお念仏の教えです。

一般的には、難しい方が尊く、簡単なもの、易しく出来ることはどちらかというと、そんな効果はない、と思いがちですが、修し易くてしかも効果絶大なのです。

阿弥陀さまがまだ仏になる前、法蔵菩薩としてご修行されていた時代に、世自在王仏という仏さまの面前において、人々をお浄土に迎えて救いたいという願いを述べられたところ、世自在王仏は沢山のお浄土やその有り様をお示しになりました。そこで法蔵菩薩は、その中から最勝なるお浄土を選ばれ、更にそのお浄土への往生の行として念仏一行を選取されました。そして何とそのお浄土を選ぶのに費やされたのが五劫ごこつという途方もなく長い時間でした。これを五劫思惟しゆいと申すのですが、それほど長期にわたって私たちを救うためにはどのようなお浄土がいいかをお考えくださったのです。そしてついにすべての人々を救うために四十八

項目でその理想のお浄土の姿を示されました。これを「四十八願^{しじゅうはちがん}」と言い、この後、兆載永劫という長い長い時間かけて、ご修行くださり、ついにその四十八項目の願いを成就されたからこそ、今現に阿弥陀さまという仏になられて、西方極楽浄土にいらつしやるのです。

そしてその中で十八番目のお誓いには「もし、私が仏になったならば、十遍のお念仏を申すすべての衆生を必ず救うぞ、それが出来ないならば私は仏にはならない」と誓われ、それが成就されたからこそ、ただお念仏をおとなえするだけで往生できることが確約されていることになるわけです。

なお、阿弥陀さまが五劫かけて思ってください、兆載永劫^{ちようざいようてう}の時間かけてご修行されたと言いましたが、その「劫」とは長い長い時間の単位のこと、あまりに長いため、譬^{たと}えでしか言い表せません。それにはいくつかありますが、その一つに、芥子^{けし}劫という譬えがあります。四方一由旬^{ゆじゆん}、つまり一辺が約七キロ四方の鉄の城に芥子の実を一杯に満たし、百年ごとに一粒取り去ることを繰り返し、空になっても劫は終わらない、という譬えです。なかなか想像することも出来ないほど、気の遠くなるような時間が一劫。それが五劫ですから、いかに悠久の時間をかけて思ってくださいかということがわかります。

そしてそのお姿を表したのが五劫思惟の阿弥陀如来像です。仏像の髪の毛は「螺髮^{らほつ}」と呼

ばれる巻毛で表されていますが、五劫思惟の阿弥陀さまは螺髪が非常に長く頭部が異常に大きいことが特徴です。長く伸びた螺髪は、五劫という途轍もなく長い時間を表わすものであります。この五劫思惟の阿弥陀如来像は、京都では「くろ谷さん」として親しまれている大本山金戒光明寺でご覧になれます。石像で、しかも三重の塔に向かう階段下にありますので、いつでもお参りすることが可能です。

阿弥陀さまはこの五劫思惟をされた後、引き続き兆載永劫にわたり、私たちが到底出来ない、色々なご修行をなさり、そしてその果報としての色々な功德をすべて込めてくださっているのが、「南無阿弥陀仏」のお念仏ということになります。

しかもそのお念仏に対してはお釈迦さまをはじめ、六方の諸仏と申しまして、東・南・西・北・下・上の仏国土の仏さまもその教えが間違いないことを証明されているのです。ですから、私たちはただ阿弥陀さまの教えを信じ、疑うことなく「南無阿弥陀仏とお念仏を申して、それによって必ず往生できるのだ」と心を定めてお念仏を申す、それ以外に何も特別なことはないですよ、ということになるわけです。これなら私たちでも実践できますよね。ただし、そうは言っても私たち凡夫は今申しました「疑うことなく」、「心を定めて」というのがなかなか難しいのが現実です。どうしても疑いの心をも抱いてしまう私たちではない

でしょうか。

法然上人は、ある経文に「私たちは一日のうちで八億四千と言われるほど、多くの思いが沸き上がり、その思いによって生じる行いや振る舞いすべてが三途、つまり地獄、餓鬼、畜生という苦しみの深い世界に堕ちてしまう原因となる」ということをお示しくださっています。

私たちというのは、毎日の生活を送っているだけで、様々な苦しみ・迷い・思いが次々と沸き上がり尽きないもの。そして、その私たちの行いすべてが悪業となる可能性があるという事です。先ほど「泥中之蓮」と申しましたが、まさに悪業の泥の中にいるような愚かな私たちということになります。

しかし、泥の中から蓮の花が咲くように、「そんな悪業深いお前でも良い」と必ず救い取ってくださるのが阿弥陀さまです。ですから、どんな心持ちのままでも「必ず生まれさせていただける」と信じて申してゆく、それ以外に何も特別なことはないのです。

拙寺のお檀家で、九十二歳で往生されたAさんという方がおられました。そのAさんとは、四十年ほど前にご縁があつてお檀家になられて以来、よくお寺にお参りくださるお方でありました。早くにご主人さまを亡くされたこともあり、団体参拝や組寺の五重相伝にもご参加

になり、ご自身の信仰を深められていったようです。私が僧侶資格を得て、自坊に戻ってきた頃には、すでに月参りのときに後ろで一緒に大きな声で日常勤行のお経をおとなえくたさっており、まだ駆け出しの私にとっては緊張しながらお勤めさせていただいた思い出があります。そのAさんは、亡くなる数年前から足腰を悪くされて、お寺へのお参りは出来なくなりましたが、月参りの際には、以前と同様、必ず後ろでおとなえするとても熱心なお檀家でありました。ただ、亡くなる二、三年ほど前からは、お体の調子が悪くなり、自宅療養と入院を繰り返されるなどで、月参りも度々お休みすることがありました。

そして平成二十年十一月十五日、「母が亡くなりました」とのご連絡が息子さんから入り、住職が枕経に参り、通夜、葬儀も済み、その後の中陰参りの時、住職の代わりにお参りをさせていただきました。その際に息子さん夫婦とAさんの生前のこと、臨終の時のことなど、色々とお話しさせていただきました。その中で印象であったのが息子さんとその奥さまが共に「全然寂しくないんです。母は、自分の遺影、白い着物、すべて何から何まで用意して往ったんです」と仰ったことでした。いつも口癖のように、「必ずお迎えに来てくださるから安心だ」と仰っていたともうかがいました。

そんなAさんが亡くなる日の前夜のこと、ちょうど家族が集まって、楽しそうにお話しさ

れていたのですが、就寝される時に、親戚の家にある「あの掛け軸持ってきておいてね」とだけ申されて床に就かれたそうです。そのAさんは、足腰が悪く腰が曲がっておられたので横になって寝るよりも正座して体を倒している状態の方が楽だと言って、寝るときもいつものような状態で寝ておられたのですが、そんな状態ですから、ご家族の方も心配で夜は何度か様子を見に行かれていました。その日の夜も、いつものように様子を見に行き、お布団を掛けてあげようとお体に触れた時には、すでに冷たくなっていたそうです。

最後の「あの掛け軸持ってきておいてね」と仰ったその掛け軸は、枕経の時には枕辺に掲げられおり、私も中陰の際に拝見させていただきましたが、まさに仏さまがお迎えに来られる様子が描かれた来迎図でありました。

きつとお迎えが近いことをさとられ、「あの掛け軸持ってきておいてね」と来迎図を所望されたのではないかと思います。お念仏に励まれたAさんですから、阿弥陀さまのお迎えをいただいて、極楽浄土に往生されたのでしょう。

さらに、Aさんは日頃から朝晩必ず大きな声でお念仏をおとなえされていたそうです。ある時には、そのお念仏の声が二階にいるお嫁さんの耳にまで届いてきたので、そっと様子を見に行くと、Aさんはその小さな体を大きく揺らすようにして声を出されていたといひます。

このことを聞いた時、Aさんには「お念仏しかないのだ」という覚悟というか決意のようなものがあつたことが知られて、一僧侶としてAさんと一時でもお念仏を共に申せたありがたいを感じたことを今でも覚えています。

また、その後の中陰参りの際に、祭壇の前に一枚の写真が置いてありました。その写真というのは、お亡くなりになる前年のお盆に拙寺の境内に咲いた蓮の写真でありました。ご自宅で療養しておられましたので、見に来ることが出来ないAさんに差し上げたものでした。その写真を大切にタンスに仕舞ってあったそうで、このことをお聞きした時は目頭が熱くなったのと同時に、写真の蓮よりも綺麗な浄土の蓮の台に往き生まれているのだと確信しました。

このAさんのように日頃からお念仏を申し続けているとこんな尊いことがありますよ、という御文があります。

娑婆に念仏つとむれば 浄土に蓮ぞ生ずなり

一生つねに退せねば この花かえりて迎ふなり

今この世でお念仏をおとなえしますと、お念仏を申したその人の蓮の花がお浄土に生じ、一生涯申し続けて命が終えた時には、阿弥陀さま自らが迎えに来てくださって、観音菩薩が持つてこられたその蓮の台に、蓮の花の上に乗し、極楽に趣かせていただくのです。ですから、そのAさんも今はお浄土の蓮の台に居られるはずと確信いたしております。

泥の中にいるような私たちであるけれども、必ずお浄土に咲く清らかな蓮の花の台に往き生まれさせていただけるのです。そのためには「ただ南無阿弥陀仏とお念仏を申して、それによって間違いなく、必ず往生できるのだ」と信じてお念仏を申す、それ以外に何も特別なことはないのですよ、という法然上人のお示しをしっかりと受け止めて、お念仏一行に励んで参りたいものです。（同称十念）

二、ご本願の行なればこそ

千葉教区 医王寺
八木 英哉

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬つて拝読し奉る宗祖法然上人『選択本願念仏集』に示し曰く、のたまわ

「弥陀如来、法蔵比丘ほうぞうびくの昔、平等の慈悲に催され普く一切を撰せんせんが為に、造像起塔等ぞうぞうきとうの諸行を以て往生の本願としたまわず、ただ称名念仏の一行を以てその本願としたまえる」と。(十念)

(『聖典』三・一二〇頁)

本日は浄土宗の「行」について、お取り次ぎをさせていただきます。

私の地元には、地域のお寺さまが宗派を問わず参加されている仏教会があります。その会合の席でのことですが、各宗派においてお坊さんになるためにどのような修行が課せられているのかということが話題に上がりました。そこでそれぞれの宗派の和尚さま方が、各々修めてこられたご修行の内容を語ってくださったのです。その一例を挙げてみますと、喉の奥が火傷をするような護摩焚きの行をされた方、食事やお手洗いの出入りに至るまでを厳しいお作法に則ってなされた方、まともには立てなくなるほど坐禅に打ち込まれた方など、皆それぞれに修めた行がいかに厳しいものだったかを語ってくださいました。その話の終盤に「浄土宗さんはどうなの？」と私にも質問が向けられました。私は「ほぼ一日中、お念仏と礼拝をするといった感じです」とお答えいたしました。すると、皆一様に「それだけなの？」、「他には？」といった顔をされるのです。物足りないと思われたのでしょうか。お話も終盤だったためか、いわばクライマックスとなるような劇的なエピソードを期待されていたのですが、実際の所それ以上のことはありません。何となく「浄土宗さんの修行は楽そうだな」といった反応でした。「浄土宗さんは他力本願だからね」と、話をまとめられた和尚さまがおられて、会合はお開きとなったのであります。正直、人間のできていない私は

「何やら面白くないな」と少々腹立ちを覚えながら帰途に就きました。特に「他力本願だからね」の一言が頭から離れません。

皆さまはいかがでしょうか。他宗派の方に「私の家のお宗旨は他力本願なの」とお話しされたら、鼻で笑われるような反応を返されることがあるかもしれません。それは「他力本願」が世間一般には、自分で努力をせずに他人のフンドシで相撲を取るかのように受け取られているからです。しかしその場合、頼りとした相手の方に「本願」というものがあるでしょうか。「本願」とは、私どものご本尊阿弥陀さまが、ご修行時代に打ち建てられた「仏のものとの願い」であり「お誓い」であります。阿弥陀さまは法蔵比丘ほうぞうびくという名で呼ばれていた修行時代に、生きとし生ける者のすべてを覚りに至らしめたいという大慈悲の御心から四十八の「本願」を建てられました。

先ほど拝読いたしました法然上人のお言葉にも「弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催され、普くあまね一切を摂せんが為に」とありましたように、阿弥陀さまが救いの目当てとされたのは「普く一切」であります。出来の良い人だけを面倒見ようということでは決してありません。殊にこと仏道修行においては全く不出来な、自力では覚りようのない私たちをも見捨てることなく、その救いの手の中に「摂め取おさってやろう」との思召しでお建てくださったの

が「本願」です。この「本願」なくして「他力本願」は成り立ちません。そう考えると「他力本願」とは、軽々しく使うことのできない、大変重い意味を含む言葉です。他人のフンドシで相撲を取るのとは訳が違うのです。

他宗の行法に比べると、お念仏は一見、楽な行に見えるのかも知れません。しかし、厳しい行が勤まらねば救われたいとするならば、和尚さま方はともかく、お檀家さんはそれに耐え得るだろうかと思えます。一方、お念仏の行はありがたいなと思うのです。花まつりに来てくれるよちよち歩きの小さなお子さんにも、念仏講にえっちらおっちらやって来られるお婆ちゃんにも、症状にもよりますが病人でさえもとなえられる易しい行だからです。阿弥陀さまが極楽往生の「行」として、ただ「お念仏」一行をお選びくださったのは、力なき一切の人々を慮おもんばかつてのことだったに違いありません。

ご修行時代の阿弥陀さま、法蔵比丘というお方がいかにして仏とお成りになったのが、浄土宗の拠り所となる『無量寿経』というお経の中に示されています。かつて国王であったこの方は、その当時、世に在ましました世自在王如来さまのお説法にいたく感激して、「私も無上の覺りを得て、仏と成りたい」とご出家をなさり、名を法蔵比丘と改められました。「比丘」とは戒を授けられた仏道修行者のことであります。法蔵比丘は、これまでに覺りを得て

仏となられた方々と、それぞれがお建てになられたお浄土の有りさまを、師匠の世自在王如来さまからありありとお見せいただきました。その数、何と二百一十億。数多のお浄土の中から、劣った所は捨て去り、勝れた所だけを選びめぐり、ご自身の浄土を建てるための手本となされたのでございます。浄土とはみな素晴らしい覚りの世界ではありませんが、修行に耐えられぬ者は入ることを許されない浄土もあるのです。従って仏の救いから漏れた者たちが存在するわけです。だから法蔵比丘はそうした者たちにまで大慈悲を向け「一人も漏らさず救い取り、覚りに至らしめたい」との思いから「本願」を打ち建てられたのでございます。一切の者漏らさず救う、そのためにはご自身はいかなる仏と成ったら良いか、いかなる浄土を建てたら皆を覚りに至らすことができようか、その浄土にはいかなる手だてを以て迎え入れようかと、隅々にまで心を巡らして四十八のお誓いを建てられました。

この本願を考え抜くこと、時間にして「五劫」。「劫」とは永い永い時間の単位です。一辺が四十里四方という途轍もない大岩の上に百年に一度、天人が降りて来て、柔らかな羽衣でその表面をスーッとまででは帰り、又なでは帰りを延々とくり返し、この大岩ひとつ擦り切れて無くなるまでが「一劫」です（盤石劫）。法蔵比丘がお考えくだされたのは「五劫」ですから、どれほどの永い時間であるか、到底計り知れません。私たちの想像すらはるかに

超えた苦心の御跡みあとこそが「本願」であります。しかも、一々のご本願の全ての終わりに「この願叶えられずば、我もまた仏と成らぬ」と、ご自身の成仏までを賭けてお誓いくださいなのです。更に全ての本願を成し遂げる為に、苦修鍊行に明け暮れることを「兆載永劫ちようさいようこく」といえますから、それこそ気の遠くなるような永きにわたって厳しい行をお勤めくださり、遂に仏とお成りになったのが私たちの御本尊、阿弥陀さまでございます。

そしてそのようなご修行の末、四十八願すべてを成就して仏と成られた阿弥陀さまは、未來永劫にわたり私たちを救い続けるために「無量寿」の仏さまに、またどこまでも救いの御手を差し伸べるそのために「無量光」の仏さまにお成りになりました。

また、仏に成られた時にお浄土もお開きになりました。それが「西方極樂浄土」です。あらゆるお浄土の善き所を選びすぐり抜いて、その粹すいを集めてお建てになられた最高のお浄土であります。そこはご本願の力によって一切の苦の存在しない、大いなる覺りの楽しみに充ち満ちた世界。鳥のさえずりや、宝の樹々の枝が風にそよぐ音、蓮池の波音までが覺りに導いてくれるという尊い世界です。しかもここに往生した者は誰もが必ず覺りに至ることを阿弥陀さまが保証してくださっています。そのような尊い世界、これが「西方極樂浄土」です。しかし、いかに素晴らしいお浄土であっても、私たちをそこに引き入れる手だてがなかつ

たなら、阿弥陀さまは普く一切を救うことが叶いません。そこでその手だてとしてお示くだされたのが「南無阿弥陀仏」と仏の御名みなを呼ぶ「お念仏」です。阿弥陀さまはその他諸々のご修行を取って選り捨て、「称名念仏」の一行を選り取られたのです。そのことは本願の中の第十八願「念仏往生の願」に次のように誓われています。

もし我、仏を得たらんに十方じっほうの衆生、至心ししんに信樂しんぎょうして我が国に生ぜんと欲して、乃ない至十念じゅうねんせんに、もし生ぜずんば、正覺を取らじ

（『聖典』一・二二七頁）

この本願の心を法然上人は「われほとけになりたらん時、十方の衆生、極樂に生まれんともいて、南無阿弥陀仏と、もしは十声、もしは一声申さん衆生をむかえずば、ほとけにならじとちかい給う」（『念仏往生要義抄』Ⅱ『昭法全』六八六頁）とお示しく下さいました。また常々に仰せのお言葉には南無阿弥陀仏とは「阿弥陀ほとけ我をたすけ給えということば」とのお示しもあります。（『昭法全』四九二頁）

つまり極樂に往生したいと心から願い、「阿弥陀仏、助けたまえ」との思いで「南無阿弥陀仏」と呼ぶ。これこそが力無き私たちのために、阿弥陀さまご自身がお選びくだされた

「本願行」なのであります。

最初に申し上げた法然上人のお言葉の中には「造像起塔等の諸行」とありましたが、これは五重の塔や仏堂を建てるとか、仏像を造るといったことであります。それは確かに後々の人々を仏道に導く機縁となりますので、施主様にも大きな功德となることでありましょう。しかしそのような大きな財力を伴う行を往生行、すなわち往生するために必要な行としたならば、往生できるのはごくわずかな方に限られ、大半の者は救いから漏れてしまいます。

考えてみると私たちは、いかなる行もまともに務まりそうにない存在です。仏道修行の第一は我が持てるものを相手を選ばず施す「布施行」ですが、嫌いな相手には、中々手を差しのべることができませんね。また布施は「喜捨」、すなわち喜んでしなければなりませんけれども中々喜んでできません。さらに仏教徒ならば本来は「戒」を守って「不殺生^{ふせつじょう}」を心がけるべきですが、多くの生き物の命を、空腹を満たす為以上に奪いながらの生活を、罪の意識すら持たずに続けています。「不偷盜^{ふちゆうとう}」といって、盗んではならぬという「戒」もありますが、切羽詰まっていて、誰にも見られていないといった条件が整えば、どなたもが泥棒の心を起こす可能性があります。「不邪淫^{ふじやいん}」という「戒」は男女の関係を乱さない、平たく言えば浮気をしないということになりますが、昨今は「不倫」という言葉を聞かない日はな

いほどです。しかも発覺すれば今度は言い訳をするために「不妄語戒」に背いて嘘を塗り重ねたりします。総じて仏さまが「こうせよ」と仰ることに是一向に耳を傾けようとせず、「してはならぬ」と仰ることの方を喜んでし続けているのが、日頃の私たちの偽らざる姿ではないでしょうか。修行の入り口にあたる戒ひとつ取り上げても、ほとんどが守り切れないのです。これではその先にある仏道修行に進むことも叶いません。まして巨額の財を投じてお堂や塔を建てるなどの大善行には思いすら及びません。難行・苦行を往生行となさる仏さまならば「残念ながら見込みなし」とサジを投げてしまわれることでしょう。そのような私たちを哀れと思し召された阿弥陀さまは「平等の大慈悲に催されて普く一切を」救うために、ごく限られた者にしか勤められぬ、言わば「難行」の「造像起塔等の諸行」は選り捨て、「本願の行」とはなさらないのです。

そうすると「お念仏」は出来の悪い人たちのために用意された、質の悪い「行」なのかと勘違いをされては困ります。他のご法語には次のように示されます。

往生の道にうとき人の申すようは、余の真言・止観の行にたえざる人の、やすきままのつとめにてこそ念仏はあれと申すは、きわめたるひがごに候。

「真言や天台などの他宗の行には耐えられない人でもやすやすと勤められる功德の劣った行法だと言うのは、きわめて誤ったお考えでありますよ」とのお言葉です。

むしろ「お念仏」には絶大なる功德が籠められているのです。阿弥陀さまは無力な私たちを救うため、自ら修めたご修行の功德のすべてを「南無阿弥陀仏」の中に籠めて「これとなえよ」と仰せになつています。仏道修行には様々な方法があるのは皆さまもご存知のことでしょう。しかしながら、「浄土往生の爲の行」となったら、その行を選ぶのは私たちの側ではありません。そのお浄土をお開きになられた仏さまがお選びになるものでしょう。凡夫の浅知恵や都合で選ぶべきものではありません。ただ本願を素直に信じて、仰せの通りに名を呼ぶお念仏こそが阿弥陀さまが選り取られた「選^{せん}択^{ちやく}本願」の行であります。わずかに六文字の「南無阿弥陀仏」のお念仏ですが、その中には阿弥陀さまの大いなる救いの力が、余すことなく収められているのですから、これほどありがたい行は他には無いのです。

例えば、水に溺れる人を救い上げようと思つたなら、泳ぐ力の無い「カナヅチ」のような人をこそ最大の力で助けねばなりません。泳ぎに心得のある人と違って「カナヅチ」の人は

恐怖心から、無我夢中でもがきます。助け手が呼びかける「体の力を抜け。抜けば浮くから」との声にも耳を貸さず、間違った方法で何とかしようと暴れるから救助者の手をもすり抜け、余計に力を使い果たし、ますます水に吞まれてしまいます。このような人が助かる方法はただひとつ、「助けて」と呼んで、舟に引き上げていただくことです。バタ足もクロールも平泳ぎもできない、まして体を浮かべる術^{すべ}すら知らぬ人は、船上の人が必ず引き上げてくれると信じて「助けて」と呼ぶ他ないのです。舟の浮力は、どんな泳ぎ上手よりもはるかに優れたもの。そして老若男女分け隔てなく、どなたが乗っても決して舟は沈むことはありませんね。多少泳ぎに心得のある人でも自力でいつまでも浮かんではいられないものではありません。いつかは力尽きる時がやってきます。過信は禁物です。

知恵もなく力も及ばない、言うなれば「仏道のカナヅチ」の私たちもこれと同じであります。自らの悪業に足を取られて苦しい世界へと溺れてしまうのが目に見えています。言わば船上の人は阿弥陀さま、私たちを乗せようと漕ぎ出してくださったのは本願の舟です。阿弥陀さまはカナヅチの私に「もっと上手く泳げ」とは申されません。「南無阿弥陀仏」と助けを呼べばいかなる人の所にも本願の舟を遣わして、必ず救い取ってくださいます。助けを呼ぶなどは格好の悪い事と迷い心を起こしたり、他の行でも往生できるなどと自力を過信せず、

素直にすることが救われる方法であります。

浄土宗立教開宗の御文にも

一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥、時節の久近を問わず、
念々に捨てざる者、是を正定の業と名づく。彼の仏の本願に順ずるが故に

とお示しでございます。歩きながらも、止まっている時でも、座る時も、床に伏しているような時でも、その行ずる者の姿は問われません。はるか前からとなえ続けてきた者も、つい最近となえ始めた者も、果ては臨終間際によくお念仏に出遭われた者も阿弥陀さまから心を離さず「南無阿弥陀仏」ととなえれば必ず極楽に救われる。これをこそ「正定の業」との仰せであります。これをとなえる者を必ず救うと、阿弥陀さまご自身が、正しく定められた善業中の善業であり、となえればまさしく極楽往生が揺るぎなく定まる「行」でもあります。これほど確かな「行」であるのは、阿弥陀さまがご本願に誓われた唯一の「行」、す

なわち「本願行」だからであります。「南無阿弥陀仏」と我が名を呼んで欲しいと、阿弥陀さまご自身が、私たちに願ってくださっているのです。

ここまでお伝えしてきたお念仏の行は、本来皆さまご自身の往生の為となえるべきものであります。とはいえ、実際のところ皆さまがお念仏をおとなえる機会は、大切な方を亡くされた時の方が多いのではないのでしょうか。

これからお話しするのは、亡き方への回向のお念仏についてとなりますが、お念仏の行のありがたさに改めて気付かされた、忘れられぬ想い出があります。

とあるお寺のご住職の四十九日法要で、司会のお役をさせていただいた時のことでした。亡きご住職にはご子息が二人おられ、ご長男が喪主を勤められました。本堂の喪主の席の隣に、椅子二つ分ほどの大きなスペースが空けられておりました。開式の時間となり、「ご参列の皆さまは堂内にお入りください」とご案内した時、ご親族に続いて一番後ろから、車椅子で入って来られた男性が、亡きご住職のご次男でした。後に聞いた所では、未熟児として生まれたこのご次男は、幼少の頃から自力歩行の困難な状態、今に至るまで車椅子なしでは生活もままならず、手にも麻痺を抱えておられたそうです。喪主の隣に空けてあったスペースは、彼の車椅子の為のものだったのです。ご兄弟とも健康であったなら二人で力を合わせ

て準備もできたでしょうが、恐らくご次男は、喪主を手伝うことも困難だったことが覗い知れます。ですからご長男も今日までの支度が大変だったことでしよう。法要が進み、司会の私から「それでは皆さま、手を合わせてご一緒にお念仏をお手向けください」とお声をかけたその直後でした。車椅子のご次男が、それはもう周りの方々がビックリするような大声で「なあーむあーみだあーぶ、なあーむあーみだあーぶ」と叫ぶようなお念仏を始められたのです。一同しばし呆気にと取られていたのですが、次第に彼の気持ちの方が分かってきました。手足の不自由な彼は、ただひとつ、お父さまのためにしてあげられることとして「せめてこれだけは……」との思いでお念仏をとなええているのだということです。全身全霊をこめて一心に阿弥陀さまのみ救いを頼む、その真摯な姿は大変尊いものでした。ご次男のこのような思いに気付いた時、私は涙を堪^{こら}えることができませんでした。私はつくづく思ったのです。不自由な体であってもとなえられるお念仏を本願としてくださった阿弥陀さまがご本尊の浄土宗で本当に良かったと。やがて、いつの日か、彼がこの世の命終える時、あの真つすぐに救いを求めるお念仏によって、お父さまの待つ極楽に往生なさると確信したのです。

またそれと同時に、私はふと、思い上がりを起している自分にも気付かされました。「では、お前には他に何ができる？」と問われたような気がしたのです。「私にだって、お念仏

しかできないではないか……。お世話になった亡きご住職のお覚りの為には、私ごとき凡夫の行う善行など何の足しにもならないでしょう。ただただ阿弥陀さまの本願力におすがりするしかないことに、改めて気付かされたご法要でした。

多くの仏さま方は出来の良い者から順に、ご自身の浄土にお引き入れなさることでしょう。しかし、私たちの阿弥陀さまは平等の憐れみと慈しみを以て、一切の者を分け隔てなく救うとお誓いになられたお方です。塔を建てたり、仏像を造立するような大きな功德はおろか、いかなる善行も全うできぬ私たち凡夫も「我をおいて他に助け手なし。呼べば決して見捨てはせぬぞ」と思し召し、どなたでも行ずることのできる、しかも最上の功德のみっちり詰まったお念仏をこそ極楽往生の正因の行としてくださったことに感激するのみであります。

法然上人が、お念仏の一行を以て新たに浄土宗をお開きくださった時、初めて私たちにも極楽浄土に足を踏み入れられる道が開かれたのです。これほどありがたいことはありません。「称名念仏」こそが私も救われる唯一の行です。

彼の人の 開き給いしこの道は 我も往き得る 易き道なり

どうぞ皆さまも阿弥陀さまの本願の力に素直にすぎり、法然上人のお勧めの通り「助けたまえ」と思いを込めて「南無阿弥陀仏」と呼ぶ、お念仏を口から離されませんようお勧めを申し上げ、この席を閉じさせていただきます。(同称十念)

三、お念仏の道

大阪教区 来迎寺
白川 雅宏

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬つて拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く、のたまわ

「仏の本願の称名なるが故に、声を本体とは思しめすべきにて候。

さて、わが耳に聞こゆる程申し候は、高声の念仏のうちにて候うなり」と。(十念)

『法然上人行狀絵図』二三 Ⅱ 『昭法全』五五九頁

本日はよくお参りいただき、ありがとうございます。今回、皆さまに法然上人の尊きみ教えを、お取り次ぎさせていただき、ありがたいご縁をいただきました、来迎寺の白川雅宏

と申します。しばらくの間ではございますが、姿勢をお楽にしてお聞きくださりますよう、どうぞよろしく願います。

本日、こちらのお寺まで上がらせていただきましたが、ここまでの距離はルートにもよりますが、およそ十キロ前後。車で参りましたが、幸いなことに道も混んでおらず、二十分もかからずにお伺いできました。

私は常々、この道路、道と言うものは、本当にありがたいなあと思っております。なぜなら道があるお陰で、目的地へと到達することができるからです。もし道がなければ、山道、荒地地を行かなければなりません。そうなると私も、今日お寺へ来させていただくのにも、大変な思いをしなければならなかったでしょう。皆さまもこのお寺にお参りなさるのも、命がけになっていたかも知れません。

今から八百数十年ほど前のことです。浄土宗を開いてくださった法然上人も、私たちに「ある道」を示してくださいました。その「ある道」こそがお念仏の道です。つまり専らに南無阿弥陀仏となえたなら、「必ずや極楽へと生まれることができる、阿弥陀さまが救い取ってください」と示してくださいだったのです。今から皆さまと一緒に法然上人が示してくださいったお念仏の道を、共に歩いてみたいと思います。

はじめにご紹介させていただいたのは、法然上人のお言葉です。

「仏の本願の称名なるが故に、声を本体とは思しめすべきにて候」

とありますように、仏さま、阿弥陀さまの本願は称名念仏なのですから、声に出してとなえなければいけません。

先ほどは皆さん、しっかりととなえていただきましたね。ありがたいことです。法然上人のみ教え通りであったかと存じます。

次に、「わが耳に聞こゆる程申し候は、高声の念仏のうちに候なり」とは、称名念仏の声の大きさについてのお言葉です。「自分の耳に聞こえるほどの大きさであっても、高らかにおとなえするお念仏と同じである」と法然上人はおっしゃっています。つまり、「たとえ小さい声であっても、しっかりと声に出してお念仏をしなさい」と法然上人はお示しいただいているのです。それについて、これからお話しさせていただきます。

長い年月をかけて修復工事がなされていた総本山知恩院の御影堂が、今年ようやく落慶を迎えます。私たちにとって、久しぶりに参拝できるようになった御影堂。本当にうれしい限りでございます。その知恩院では、修復前に大きな行事が行われていたのを、皆さん覚えておいででしょうか？ そうそれは、法然上人八百年大遠忌です。覚えている方もおいでだと

は思いますが、それは盛大に催されました。

そして、全国浄土宗青年会では十月二十四日、二十五日と、場所は御影堂で、北は北海道から南は沖縄までの四百名ほどの青年僧が集まり、八百年大遠忌と大別時念仏会という二つの法要を行いました。そしてその二つの法要の間には、青年僧らしく、二十四時間の不断念仏を行いました。不断念仏とは、読んで字のごとく二十四時間ほぼ途切れることなく念仏をとなえ続けることです。

しかしながら、いくら青年僧といっても二十四時間ここに座り続け、お念仏をとなえ続けることは難しいものがあります。食事もし、お手洗いにも行きます。足も痛いし、眠くもなります。ただ、その中にも幾人かは最低限の休憩しかとらず、お念仏を続けていた者もありました。

そのようななか、二日目の早朝、役員の方が次のようなお話をされました。

「ここには早朝にもかかわらず、たくさんの方が大殿に出てきて、お念仏をしてくださっています。中には、一睡もせず、ずっとおとなえてくださっている方もいるでしょう。大殿にいても、疲れのためウトウトしながら木魚をたたき、終いには経机をたたきながら、お念仏してくださった方も見かけました。ひよっとしたら、仮眠を取って、十分ほど前に大殿

に出てきた方もいるのではないのでしょうか？ 控え室には、先ほどまでお念仏をとなえていて、今は仮眠を取っておられる方もいます。でもね、その三者三様のお念仏ではありますが、その功德はまったく同じなんですよ。これって、すごく理不尽だと思いませんか？ せっかく頑張って一昼夜お念仏したのと、さっき出てきてちょっとお念仏したのが同じだなんて。でも、僕はこれが一番ありがたいことだと思っています。

お念仏はその一遍一遍に、阿弥陀さまが必ず我々を救いとってくださいると、お約束していただいています。

一昼夜頑張ったお念仏、ちょっとだけ出てきてとなえたお念仏、いずれも同じ功德です。また、法然上人がおとなえになったお念仏も、私たちのお念仏もなんら変わらない功德が備わっているのです。なんとありがたいことでしょうか」と、このようにおっしゃいました。

私は役員でしたので、となえはじめはバタバタしていて疲れており、しかも足も痛かったです。しかし一晩過ぎた夜明けのお念仏の感動は、今でも忘れることができません。そのとき高らかにとなえたお念仏の声は、感動のお念仏として今なおずっと心に残っているのです。はじめに申しましたように法然上人は、本願の称名である声に出しておとなえするお念仏

は、阿弥陀さまの願いになつてゐると仰せです。それだからこそ、私たち青年僧は、二十四時間の不断念仏を声に出して勤めたのでした。

その声に出して申すお念仏のありがたさを、実際に示してくださった方がいます。その方は、私の父であります。先代住職でもある父は、お説教師でした。ありがたいことに、全国から呼んでいただき、色んなところでお話をさせていただいておりました。

さてその父ですが、野球が好きで、熱心な阪神ファンでもありましたので、チケットをいただいては、よく甲子園へと通つておりました。

十五年前の九月に入つたところ、二日続けて甲子園へと行きました。その翌日のことです。いつものように、「おはよう」と父に声をかけたところ、「おはよう」とかすれ声で答えたのです。

「どうしはつたんですか？」

「昨日はええ試合やったし、ちょっと張り切つて応援しすぎたかな？ 別にのども痛くもかゆくもないし、夏の疲れが出るころやろ。放つておいたら治るやろ」

などと言つておりました。

そしてしばらく様子を見ていましたが、一週間、二週間、三週間が経ち、お彼岸が過ぎて

も一向に治りません。明らかにおかしいので近くのお医者さんに診てもらいました。

今でも、診察から帰ってきた時のことは忘れられません。ちょうど玄関先に私がおりまして、「雅宏！」と呼ばれました。

「この声一生治らんかもしれんと言われた」

「なんでですか？」

「原因が分からんらしい」

「そんなん、困るじゃないですか」

確かにそうです。声がかすれたままでは読経にも支障をきたします。そこで、次は少し大きい病院へ行くと、「ちよつと大変かもしれないから、紹介状を書きますね。検査してもらってください」と言われ、そしてようやく大学病院で精密検査を受けると、「食道癌」と診断されました。それともかなり病状が進んでおり、このままでは余命半年と宣告されました。抗がん剤治療、放射線治療といろいろと手を尽くしましたが、なかなか回復しません。それでも何とか入院を繰り返しながら、治療を進めていきました。

しかし次第に病状は悪化していき、翌年の七月の末頃、食道癌が気管を圧迫し、呼吸困難に陥りました。楽になるには気管に穴を開け、そこから直接酸素を取り込むという手術をす

ることが必要となりました。しかしながらこの手術をすると、そのままでは声が出なくなり
ます。声を出せる唯一の方法は、喋りたいときに、自分の指で穴を塞ぐというものでした。
ただ、それをしてもかすれ声で、しかも小さな声しか出せません。

布教師である父は、それこそ全国各地で、檀信徒の方に声に出しておとなえするお念仏を
勧めておりましたので、「声が出なくなる」とお医者さんから宣告された時は、本当につら
かったことと思います。

しかし、手術の前に父は、はじめに紹介させていただいた法然上人の御法語の、「わが耳
に聞こゆる程申し候は高声の念仏のうちに候なり」という一節をあげて、この「わが耳に
聞こえる程度の念仏であっても、高らかにおとなえするお念仏、高声の念仏と同じである
というお言葉がどれほどありがたいか今身に沁みてわかる」と申しました。そして、数回お念
仏をとなえては咽せ、また数回お念仏しては咳き込み、すっかり衰えて小さくなった身体全
体を使って息をしながら、お念仏をしていました。

その後、手術が終わって、何とかお盆は乗り越えたものの、結局はあまり長く持ちそうも
ないという状況になっておりました。そのようななか、私の妹が十月に結婚を予定しており
ましたので、それならばということで、結婚式を八月二十六日に変更してもらうことにしま

した。しかしながら、病状はさらに悪化の一途をたどっていました。せめてもの思いで、父の前で簡単な結婚式をしようと、結婚式の四日前の夜に新郎とともに病室に集まりました。式の日程を変更をして、かなり迷惑をかけていたはずなのですが、式場のスタッフがそのような事情ならばと、病院の空き部屋を借り、そこで妹にウエディングドレスを着せてくださいました。そして父にドレス姿を見せることができ、父はとても嬉しそうな様子でした。

そしてその翌日、地蔵盆の行事が行われた八月二十三日のことです。行事後の片付けをしていたら、母親から「お父さんが危ないから、できるだけ早く来て」と電話が入りました。

慌てて片付けを終え、大急ぎで向かおうとしました。その時ふと、父の机のわきにある数珠掛けに、普段使っていたお数珠が目につきました。病室には予備を持って行っておりましたが、何気なく、そのお数珠を手に取り、家内と病院へ向かいました。病室に到着すると父は苦しげに、そして浅い息遣いで「ハッハッハッ」と呼吸をしておりました。ほとんど意識のない状態でしたが、その父の手に長年親しんだお数珠をかけてやると、意識がほとんどないなか、胸の前で両手を合わせ、口をかすかに動かします。その口の動きは、まさしく南無阿弥陀仏となえる口の動きでした。しかし、気管に穴をあけているため、もはや声は出ません。でも、私たち家族には、父がはっきりと大きな声で、まさしく高声のお念仏をしてい

ることがわかりました。いまでも、あの時の病室の光景はまぶたに焼きついております。

お念仏の声そのものは聞こえなくとも朦朧とする意識の中で必死に、高声のお念仏をおとなえしていた父は、念仏信者のあるべき姿を示していたといえるかと思います。ですから必ずや阿弥陀さまのお迎えをいただいて、極楽浄土に往生したと確信できたのでした。

はじめにご紹介させていただきましたように、法然上人は、

「仏の本願の称名なるが故に、声を本体とは思しめすべきにて候。

さて、わが耳に聞こゆる程申し候は、高声の念仏のうちに候なり」

とお示しいただいているところからしますと、阿弥陀さまの本願に説かれるところの念仏は称名念仏なので、やはり声に出してとなえなければいけません。ですから、お念仏の声は大きいに越したことはないということになります。しかしながら、場所や状況によってはそれがかかない場合もあります。そのような場合は、たとえ小さい声であっても、しっかりと声に出しておとなえしたならば、大きな声の念仏と同様の価値があるというわけです。

昨日ようやくお念仏の教えに目覚めてとなえるお念仏、かすれ声でとなえるお念仏、皆さ

まがお仏壇の前でおとなえするお念仏、法然上人がおとなえするお念仏。これら全て、同じ功徳が備わっているのです。

ここにおいでの方々は、普段からお念仏をしつかりとおとなえしてくださっていることでしょう。しかしながら、これからはより一層、場所を選ばず、時を選ばず、怠ることなくお念仏の道を精進して、ともに歩んでいくことをお願いいたしまして、お話を終わりにしたいと思います。

それでは最後に皆さまとともに、一緒にお念仏をとなえましょう。どうぞ合掌ください。

（同称十念）

四、お念佛からはじまる幸せ

大分教区 蓮華寺
鶴山 恒教

如来大慈悲哀愍護念 同称十念

無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇

我今見聞得受持 願解如来真實義

つつしみ敬って拝読し奉る。宗祖法然上人のご法語に曰く、のたまわ

「念仏に物憂き人は、無量の宝を失うべき人なり。念仏に勇みある人は、無辺の悟りを開くべき人なり。相構て願往生の心にて、念仏を相續すべきなり」と。(十念)

(『法然上人行狀絵図』四十五 、『昭法全』六三八頁)

皆さま、当山の月例念仏会に、ようこそお参りいただきました。わずかな時間でございましたが、法然上人の教えに沿って、時を定め場所をととのえて、共にお念仏をとなえること

が出来ましたこと、誠にありがとうございます。

先日、年に一度の健康診断に行ってきました。午前九時前というのに、受付には人ばかりができています。多くの方が、少しでも健康で長生きをしたいと願っているからこそ、大切な財産と時間を使って健診を受ける訳です。そして無事健診が終われば最後は支払いです。多くの方が、明細書のチェックに真剣です。出る物は少なく、残る物が多い方が好ましいと思っているから真剣なのです。私を含め多くの方が「幸せ」の条件と言われる「身・命・財」に気を奪われています。先に拝読した法然上人のご法語は、誰しもが願う「幸せ」について語られたものです。現代語に訳しますと、「念仏をとなえることに心が進まない人は、計り知れない大きな宝を失っている人です。励んで念仏をとなえる人は、極楽に往生し、最高の悟りを開くことができる人です。必ず往生したいものと願いつつ、念仏を続けてゆくべきです」とでもなりましょうか。苦しみや悲しみの世界を、永遠に迷い続けなければならぬ私たちが、阿弥陀さまのお慈悲により救われることを、お釈迦さまは教えてくださいました。その阿弥陀さまに、助けたまえと願い、お念仏をとなえ続けることで、仏道を修めて得られるすべての功德、すなわち「無量の宝」を得て、「無辺の悟り」を開くことが出来るというのです。仏教徒にとって、それは幸せの極致であります。

約二千五百年前に、お釈迦さまが説かれた仏法は、人間が人間として、この世も次の世も「無量の宝」を得て、幸せに成るための教えです。その究極の幸せの状態が、「無辺の悟りを開く」ことであり、またそのような状態になることを、「成仏する」と申します。今日、「成仏する」とは「死ぬこと」と同じ意味で使われがちです。しかし、「仏に成る」と書いて「成仏」ですので、「死ぬ」と言うような意味では決してありません。仏教徒の幸せの極致である「成仏」について、布教の大先達は「仏に成るとは、心がホドケけることだ」と説いてくださいました。人間には、沢山の心の弱点があります。その弱点を煩惱といい、その代表格を「根本煩惱」といいます。一つには、あってもまだ欲しいと思ってしまう「貪り」の心。二つには、ついつい怒ってしまう「瞋り」の心。三つには、自分の事ばかりに執着して、大事なことが分からない「痴か」な心とされています。その「貪・瞋・痴」の煩惱でがんじがらめになっているのが人間の心であり、その煩惱が完全にほどかれる状態を、「ホトケに成る」と言うのです。「心がほどける、ほどける、ほどけ、ほとけ、ホトケに成る」と。誠に分かりやすいご説法だと、拝受いたしました。

法然上人が「この世も次の世も、阿弥陀さまを頼りに救われていこう」とお念仏ひとすじに決心されてから、間もなく八百五十年が経ちます。その節目の年は四年後の令和六年であ

り、その節目を「開宗八百五十年」と申します。浄土宗では、その機運を高めるために「お念佛からはじまる幸せ」というキャッチコピーを定めました。キャッチコピーとは、広めたいと思う商品や作品を端的に表す、インパクトのある言葉を指します。ここで言えば、広めたいものがお念仏であり、「お念佛からはじまる幸せ」とのフレーズが、インパクトにあたる部分です。

先ほど、仏教の目的は、「貪・瞋・痴」の心の弱点を克服し「心がホドケた」状態に成ることだと申し上げました。これまでに多くの先達が、八万四千もあるとされるお釈迦さまの教えの中に、「仏と成る」ための道を求められました。奈良の唐招提寺（とうしやうだいじ）を開かれた鑑真和尚（かんじんわしやう）も、比叡山を開かれた伝教大師（でんぎやうだいし）も、高野山を開かれた弘法大師（こうぼうだいし）も、そして、我らが祖师法然上人も、自他ともに真の幸せに成るために、血のにじむような努力をしてくださいました。法然上人は、数ある「仏と成る」道の中から、心の弱点を克服出来ない私たちのために、阿弥陀さまが残された「往生の行」すなわち「ナムアミダブツ」となえる行をもって、「仏と成る」ことが出来る、先のご法語でいえば、『念仏に勇みある人は、無辺の悟りを開くべき人なり』とお示しくだいました。法然上人は、私たちにお念仏となえる行が何故ふさわしいかという理由として、次の二つを挙げられています。先ずは、お念仏の行が、すべて

の仏道修行の中で、最も行じ易いからという理由です。人間は「易しい」というと、あまり関心を持たない傾向にあると感じます。例えば、私が右手の「人差し指」で皿を回したとしても、皆さんはさほど驚いてくださらないでしょう。しかし、逆立ちをして「足の指」で皿を回したならば、皆さんは必ずや私に大きな拍手をしてくださるでしょう。やはり人間は、「易しい」事より「難しい」事の方に関心があるのです。

しかし、阿弥陀さまは反対です。誰でも平等に救いたいというのが仏さまの願いですから、「易しい」ということは、仏さまにとって一番価値のあることなのです。「ナムアマミダブツ」ととなえるだけなら子どもでも出来ます。歩いていても座っていても横になっても出来します。このように阿弥陀さまは、すべての人を救おうとして「最易」のお念仏を選んでくださいました。その阿弥陀さまの親心にしたがって、ひたすらにお念仏をと覚えてゆくと、法然上人はお勧めくださるのです。

次に、お念仏は「最勝」だからと申されています。「最易」のみならず「最勝」、つまりすべての行の中で一番勝れているからというわけです。

実は私、今は立派な体格をしています、生まれた時、一千二百グラムしかなかったそうです。そんな未熟児の私を、父母は片時も離れず世話をし、母乳を含ませて育んでください

ました。瀕死状態の私は、親の愛と母乳のめぐみをいただいて救われたわけです。私たちは、宗教的には生まれたばかりの赤子のようなものです。だから、いくら勝れた行だからといっても、難しければ実行することは困難です。しかし、行じ易しいからといって、劣った行、功德の少ない行であっては、赤子は健全に発育することは出来ません。阿弥陀さまは、そんな赤子のような私たちを心配してくださり、自らの仏道修行で得たすべての功德、すなわち「無量の宝」を、「ナムアマダブツ」のお念仏に含めてくださいました。私は五十年前、私の命を救ってくださった母乳について、いまだに詳しいことは何も知りません。赤子であった私は、母にすがって、母乳を飲みさえすればよかったのです。同じように、お念仏にはどんな功德が含まれているかは知らなくても、阿弥陀さまにすがり、お念仏をとさえ続けるだけで、無量の功德を受けることが出来るのです。

江戸時代中期、現在の福島県で活躍された浄土宗僧侶に、無能上人という方がおられました。この無能上人が、阿弥陀さまと交わした日課称名の数は、当初は若干遍だったそうですが、徐々に一万遍、三万遍、六万遍と増えていき、ついには八万遍十万遍になったと伝えられています。一日を秒に換算すると八万六千四百秒になることを考えると、無能上人の生活は、誠に尊いものでありました。その無能上人の詠まれた和歌に、

はじめには　ものうかりしが　今はただ　念仏せざれば　淋しかりけり

とあります。お念仏をとなえはじめた頃は、お念仏を申すことが面倒であつたけれども、励んで続けているうちに、逆に念仏をとなえていないと淋しいほどになったとの詩意でありましょう。まさしく無能上人は、先のご法語、すなわち、

念仏に勇みある人は、無辺の悟りを開くべき人なり

とのみ教えを實踐し、怠け心が精進の心へと更生する功德を得られた方です。

大正十九年初夏、お念仏婆さんと呼ばれ、周りの者から慕われた、「荒巻くめ女」が極楽へ往生されました。彼女の生涯は、私たちの幸せの定義「身・命・財」を満たすものではありませんでした。夫に裏切られ、父母とは早々に死に別れ、子宝にも恵まれず、晩年は六畳半の侘び住まい、天涯孤独の身であつたといわれています。一般的に、彼女の人生は「不幸なもの」と言われそうですが、残された歌や言葉を拝見する限り、彼女の周辺にそんな暗い

要素はまったく感じられません。そのくめ女の言葉を紹介します。

少しの雲も晴れにけり。いよいよ心十五夜の有明月ありあげつきとなりにけり。ただただ呼びてナム
アミダ仏。狭くとも暈一枚仏間にて、衣食もせずに臥せもせず、念仏以外はもの言わず、
我身一人の規則なり。この仏間、われが為には千暈敷、おもいをなして申す嬉しさ。称
うれば死して後は極楽の、花ふる浄土の真中に、生まれて菩薩の仲間入り。

九州で、筑紫の聖女とも呼ばれた「荒巻くめ女」は、無能上人と同じく、法然上人のみ教
えを深く信じ、念仏に励み、苦しみが苦しみでなくなるという功德を得られた方です。

法然上人のお歌に

池の水 人の心に似たりけり 濁り澄むこと 定めなければ

とあります。煩惱を持つ人の心は、池の水の如く定まり難く、時とし明るく、時として暗い
ものののだというお諭しです。無能上人や荒巻くめ女のように、いつも正しくありたいと

思っている、それがなかなか出来ない私です。そんな私に対して、出来ない時は出来ないままに、「ナムアミダブツ」ととなえれば良いと、阿弥陀さまはお慈悲をかけてくださいます。そうすることで阿弥陀さまのお慈悲の功德を受けて、変わらぬままに何かが変わってまいります。

先日、京都で地下鉄に乗りました。夕方の帰宅ラッシュのため、私の乗った車両は満員でした。多くの方が通路に立っています。そんな中、青年が人生の大先輩に席を譲りました。譲ってもらった女性は「おおきに」と喜んで座り、言われた青年は「どういたしまして」と笑顔でそれに答え、その様子を見ていた私は心が明るくなりました。一人の青年の善事が周りを幸せにしたのですが、車内には、青年のような行動を起こせなかった人も数多くいました。彼女に声をかける勇気が持てなかった人。会話やスマホいじりに興じて、彼女に気付かなかった人。我が身可愛さのために、気付かないふりをしてしまった人。皆、先天的に「良心」というものが与えられていて、出来ればあの青年の様でありたいと、心のどこかで願っています。しかし、時とし明るく、時として暗い立場のもので、それが上手に出来ません。そこを深く自覚をして、阿弥陀さまにすがり、お念仏をとなえるのです。

お念仏をとなえている私は、我が身の事もままならない、弱く愚かな立場のものですが、

その愚かな私がとなえているお念仏は、阿弥陀さまによって、すべての仏法の功德が含まれた「最勝」の行なのです。ですから、お念仏をとなえながら人は殴りにくい、お念仏をとなえながら万引きはしにくい、というような現象が、私たちの身の上に起こるのです。法然上人は、そのようなお念仏の功德を「生けらば念仏の功つもり」（『法然上人行狀絵図』二十一）とご法語でお示しくださっています。

来る令和二年七月二十四日、東京オリンピックが開幕します。それに向けて各地で聖火リレーが予定されていますが、その種火は、ギリシャのオリンピックアで日光により採火されるそうです。勿論、太陽の光だけでは点火することは難しいので、凹面鏡を用いて日光を集め、採火させるそうです。同じように、阿弥陀さまの万物を救いたいという慈悲の光は、太陽の光の如く全世界を照らしてくださっていますが、道理の暗い私の心に、信仰の火をとすることは容易なことではありません。慈悲の光を集める行為、即ちお念仏をとなえ続けるという行の実践によって、火で焼かれても焼けず、水に流されても流れないような信仰の火が、私たちの心にとまされます。私たちは、ありがたいことに人間に生まれ、仏教に逢い、お念仏の教えを受け取ることが出来ています。すでに、この世も次の世も幸せに成るための準備は、阿弥陀さまによって整えられています。あとは私たちが、その親心を深く信じ、阿弥陀

さまを慕い、日課称名に励んでいけるかどうかであります。「身・命・財」の幸せもありますが、たいものです。しかし、『お念佛からはじまる幸せ』は、更にありがたいものです。そこを喜んで、共にお念仏に励んでまいりましょう。

当山の月例念仏会にあたり、法然上人のご法語について、少しばかりお取り次ぎをいたしました。ありがとうございます。（同称十念）

あとがき

この度は令和二年度『布教羅針盤』をお読みいただきありがとうございます。本年度も『布教羅針盤』をお届けさせていただきました。

今シリーズのテーマは、当初、「所求」「所帰」「去行」「まとめ」をそれぞれ二か年ずつ、計八か年の予定で進めており、平成二十九年度は「所求1」、平成三十年代は「所求2」、平成三十一年度（令和元年度）は「所帰1」としておりました。

しかしながら、『布教羅針盤』の在り方を、布教委員会におきまして検討する中で、さらに昨今の社会情勢に合わせた内容へと転換していく方向性が見出され、一刻も早く進めるべく、急遽、テーマを二か年ずつから一か年ずつへと短縮することとなりました。したがって、昨年度は「所帰1」でございましたが、本年度は「去行」としてあります。何卒趣旨ご賢察のうえ、ご理解くださいますようお願いいたします。

現在、刷新した『布教羅針盤』の構成について、鋭意検討しておりますので、今しばらくお待ちいただければ幸いです。

令和二年四月

合 掌

浄土宗教学部

令和2年度 布教羅針盤

所求・所帰・去行

去行 ―― ただ一向に念仏すべし

令和2年4月1日 発行

発 行 浄 土 宗

〒605-0062 京都市東山区林下町400-8
TEL (075) 525-2200(代)
FAX (075) 531-5105

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4
TEL (03) 3436-3351(代)
FAX (03) 3434-0744

発 行 人 川 中 光 教

編 集 浄 土 宗 教 学 部

編 集 協 力  浄土宗出版

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4
TEL (03) 3436-3700
FAX (03) 3436-3356

印 刷 (株) 共立社印刷所

表紙デザイン 藤原印刷株式会社

浄土宗宗務庁

©Jodo Shu, 2020 Printed in Japan
<https://jodo.or.jp/>



淨土宗